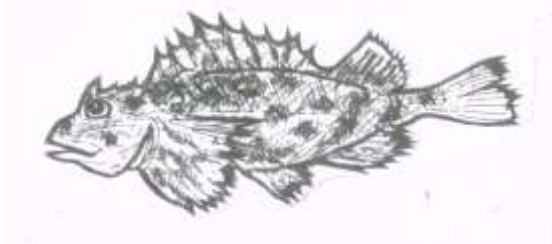


# ひとり芝居 天の魚 (てんのいを)

原作 石牟礼道子「苦海浄土」 脚本 砂田明

出演・脚色 川島宏知 舞台監督・音響 白木喜一郎  
ナレーション 砂田エミ子 (録音)



水俣病 は公式確認60年を超えましたが、今も新たに認定を申請する人々が絶えません。また、公式確認の頃に生れた胎児性患者たちは還暦を迎える歳になりましたが、病気とたたかいながら、毎日を懸命に生きています。

上演するのは、その水俣病が発生したころの物語、石牟礼道子著『苦海浄土』の一節です。水俣の漁家を訪ねた著者を「あねさん」と呼んで語り掛けるのは、天草から海を渡って水俣に移住し一家を築いた老爺。その脇には、声を発しないけれど、幼い胎児性の男児が身を横たえています。

ひとり芝居として最初に演じたのは、新劇俳優の故・砂田明氏。1972年に夫妻で水俣に移住、そして1993年の他界までに全国で556回公演、1980年にこの劇で「紀伊国屋演劇賞特別賞」を受賞しました。

当初からのスタッフで、2006年以来ひとり芝居を継承・上演してきた川島宏知による公演です。砂田明氏との通算公演回数は、600回を超えました。

## 川島宏知 かわしま こうち 略歴

1946年 高知県宿毛(すくも)市生まれ。舞台芸術学院にて砂田明氏の教えを受け、卒業後、氏の「地球義塾」に参加。砂田夫妻の水俣移住後は「劇団三十人会」に参加。会解散後は事務所に所属して舞台・TV・映画出演や、外国映画吹き替え、ナレーション等の仕事に関わる。

舞台演劇 「三人姉妹」(ヴェルシーニン役)、「道元」(道元役)、「ガラスの動物園」(ジム役) など。

映画 「郷愁」、「宮沢賢治物語」、「四万十川」、「幸福の鐘」、「ゆれる」など。

TVドラマ 「大地の子」、NHK大河「炎立つ」「吉宗」、「相棒」、「夫婦善哉」など。

CF 「JR東海Xmasエクスプレス」、「NTTドコモ」、「富士通」など。

## ● あらすじ

1964年の初秋、かつて耳にしていた神様（龍のウロコ）を見せて欲しいと、一人の女性（この作品の作者自身）が江津野家を訪ねてきた。水俣病が業病と見られていたばかりでなく、伝染病と誤解されるが故に、訪れる人もめっきり減った江津野老は、彼女を快く受け入れ、嬉々として語る。

この老夫婦一家には一人息子の清人と、その子として三人の男児がいる。次男である孫の奎太郎は9歳。母親のお腹にいるときに被害を受け、胎児性水俣病患者としてこの世に生を受けた。

江津野老も清人も同じ病ではあるものの、世間の目ははばかりられる為、水俣病として名乗りを上げることもできなかった。病院通いなどでの出費は日々の暮らしを困窮へと追いやるばかり。不自由な体に鞭打ちながらも、日々の糧を求めて老夫婦と清人の三人は、歩けない、喋れない、自分で食べられない、トイレにも行けない奎太郎を残して、不知火海へと漁に出かけるのだった。

久しぶりの来訪者と、焼酎とで、一気に心の内を語り尽くす江津野老。その傍ら、そっと客人をうかがう汚れなき野葡萄のような瞳をした奎太郎の姿。五体かなわぬ身であっても、優しく、魂の深い孫の存在は、江津野老にとっての生きがいになっていた。祖父と「あねさん」の座談の輪に呼ばれた奎太郎少年は、指や肘を傷つけながら嬉々として近寄る。そして江津野老の腕から客人に手渡されると、母親に抱かれたかのように眠りに落ちていく。

江津野老の話は続く。天草から水俣に渡り百間港の護岸工事の作業員として働いた話、伝染病と疑った人々は家の前を息を殺して足早に過ぎ去る、買い物に行っても代金を直接に手では受け取らないこと。そして、自然豊かだったころの漁での数々の懐かしさにも思いをはせる江津野老。捕りたての魚をおかずや肴にしての夫婦二人だけの舟上の宴。「わしらの舌は殿さん舌でござす」との誇り。そして「魚は天のくれらすもんでござす」の言葉が、芝居のちょうど中頃に呟かれる。

焼酎のせい、少年だけでなく江津野老もまどろんでいく。朝鮮窒素会社の話から初恋相手が売られた話まで、語り尽くした老翁の、劇終盤での目を見張るほどの晴れ姿は、夢か、現（うつ）か。

陽転そして再び暗転の舞台が、篠笛と琵琶の音色に導かれていく。

## ● 方言解説

あげん・あがん・あぎゃん＝あのような　うてあう＝相手にする、構う　おるげ・わしげ＝わが家がまだす、きばる＝精出す、頑張る　ぐらしか＝愛おしい、可哀想　せからしか＝うるさい、煩わしい  
そしこ＝それだけ　はらかく＝腹を立てる　ぶえん（無塩）＝刺身、生魚　太か＝大きい  
ふのよか＝運がいい　ほげる＝穴が空く　みぞか＝かわいい　めかかると＝見える、見つかる

## ● 天の魚（てんのいを ten-no-iwo） 題名の由来

\* 「魚は天のくれらすもんでござす」という、劇中の爺様の語り。「いを」は関東の発音では「うお」。魚河岸、山椒魚などの読みに残っています。

\* リヴィア・モネさんによる『苦海浄土』（くがいじょうど）の英訳本 “Paradise in the Sea of Sorrow” では、この爺様の語を “Fish are a gift from heaven” と訳しています。

スタッフTシャツには、その訳文をレイアウトしました。イラストの魚はガラカブ（カサゴ）。

2008.8.21

新編日報

「李よ、おるが家に  
や神さまも仏さまも、  
よその家よりやうんと  
おらすはって、お前し  
そがいちばんの仏さま  
じやわい、じいさまは、胎児性  
水俣病のために重い障害を背負っ  
た奎太郎少年をひさに抱いて語り  
かける▼水俣病患者の世界を描く  
一人芝居「天の魚」の公演が九月  
六、七日、阿賀野市と新潟市で行  
われる。江津野老を演じる俳優の  
川島宏知さん（左）は「じいさまと  
ほしい」と語る▼「天の魚」は水  
俣市在住の作家北条道子さんの  
著書「苦海浄土」を基に、演劇  
家の砂田明さんが舞台化し自ら演  
じた。全国を巡回し五百五十六回  
の上演を重ねたが、一九九三年に  
砂田さんが亡くなって以降、公演  
は途絶えていた▼砂田さんの弟子  
である川島さんは仲間間の勧めもあ  
り、憧んだ末に芝居の継承を決意  
した。一昨年のことだ。「砂田と  
同じことはできないが、演劇とい  
う形では水俣病を伝えることはで  
るのではないか」▼折しも新潟市  
美術館で「水俣・新潟展」が二十  
四日まで開かれている。水俣病が  
もたらした悲劇や差別のありさま  
を展示し、行政や企業の責任を問  
う。砂田さんの「天の魚」もまた、  
芝居を通じて水俣病を告発する開  
いたった▼川島さんは復活公演に  
当たって、告発劇の色が濃い砂田  
さんの台本に少し手を入れた。原  
作にある母と子との物語を生かし  
て、家族のきずなや人々の暮ら  
しに光を当てたのだ。川島さん  
の思いは、新潟水俣病の被害者の  
ありふれた日常を描いた映画「阿  
賀に生きる」に重なるように見える。